

年間第16主日

2015/7/19 高円寺教会
山内啓輔（長崎教区助祭）

第一朗読 エレミヤ 23・1-6

第二朗読 エフェソ 2・13-18

福音朗読 マルコ 6・30-34

今日の福音は大きく分けて3つのグループの視点から読み解くことができます。まず弟子たち、次に群衆、そしてイエス様の視点です。

弟子たちは先週の福音で2人ずつ近くの村々へ派遣されました。その時に持って行ってよいと言われたのは杖一本と下着一枚と履物だけでした。すべてを神にゆだね、福音を言葉と行いをもって告げ知らせた結果をイエス様と仲間たちに報告しに帰ってきます。その多くの報告は多分喜びに満ちたものであったでしょう。そして帰ってきたらきたで、イエス様のところに入出入りする人が多く、食事をする暇さえなかった。群衆たちは自分たちが派遣された村やその噂を聞きつけた周りの村々からついてきたのでしょう。イエス様から与えられた力をもっと私たちに見せてほしい、もっと色々なことを教えてほしい群衆の渇きは弟子たちに休む暇も与えません。しかし、イエス様はいいます。今日の福音の唯一のイエス様の言葉です。「さあ、あなた方だけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい。」といわれたので、それを実行するために船に乗り込んだのはいいものの、群衆はそれを見て当然ついてきます。弟子たちは人里離れたところに集まった大勢の群衆を見て何を思ったのでしょうか。せっかくイエス様に休みをもらったのに、この群衆たちはもっと気を利かせておれたちを休ませろ！！などと思っていたなどということはないでしょう。現代においてこのような司祭がいたら皆さんは幻滅し、じゃあなぜあなたは司祭になったのかと思うことでしょう。弟子たちはイエス・キリストから権能と力を授けられていたのですから、少なくとも、多くの群衆を見て、この人々がどれだけ神の力と言葉を欲していて、またそれらを必要としているかを肌で感じたはずですが、しかし、食事をする暇もなかった弟子たちもあくまでただの人間ですから、お腹はすくし、眠いし、トイレにも行きたいと思うでしょう。そこで感じたのは、自分たちの限界、自分たちがいかにちっぽけな存在であるかという現実には再びぶつかったのではないのでしょうか。人間は、様々な力や権力をもつと、必ずと言っていいほど、その力や権力におぼれ、それに振り回され、失敗することがあります。そのような失敗を実際に自分でやってしまったり、やってしまった

人を見たりすることで、人間としての弱さをあらためて自覚し成長していくの
でしょうけれど、弟子たちにとってのそれが、まさにこの時であったのではな
いでしょうか。イエス様に権能を与えられ、それを行使しているうちに、それ
がまるで自分自身の力によって行っているという錯覚に陥りそうになる時に、
再び現実の壁にぶつかり、自分がいかにちっぽけで限界をもっている存在なの
かを再確認することによって、先週の福音で読まれた、杖一本と履物と下着し
か持たずすべてを神にゆだねた弟子たちの偉大な信仰が垣間見えてきます。そ
んな時に、イエス様ご自身が群衆の前に立って教え始められました。

一方、群衆たちは、弟子たちがどこかへみんなで出かけていくのを見て、先
週の福音にあったような悪霊を追い出したり、病気をいやしたりする奇跡をま
たどこかへ行っておこなうのだろうと思ったのでしょうか。それは同時に、今こ
こでその奇跡を必要としている自分たちが見捨てられたように感じてしまい、
悲壮感や怒りを呼び起こしたのかもしれない。そして、彼らが行う奇跡や福
音、つまりよい知らせを聞きたくて、弟子たちが乗る船を追いかけ、彼らより
先に目的地に先に着いてしまいます。その行動力には目を見張るものがありま
す。そして、弟子たちに数々の奇跡を行ってもらいその福音を聞こうとしたら、
それ以上のものと出会います。それはイエス様自身との出会いでした。弟子た
ちに悪霊を追い出す権能や奇跡を行う力を与えたのは、間違いなくイエス様で
す。その力を与えた方と直接出会うことができ、その教えを受けることができ
た。そして、福音書には書かれていませんが、そこでも数々の病人をいやした
りしたことでしょう。こうして、多くの群衆はイエス様に旧約の成就を見まし
た。特に今日の第一朗読で読まれた、エレミヤの預言の最後に「彼の名は『主
は我らの救い』と呼ばれる」と書いてあり、群衆はこのことを身をもって実感
したことでしょう。「イエス」というヘブライ語の名前が表わす意味自体が「主
は我らの救い」という意味をもつ名前ですので、このナザレのイエスに救いの
完成が現れたと思うのも当然のことだったのではないのでしょうか。こうしてこ
のイエス・キリストを通してパウロが第2朗読で言うように、御父である神に
近付くことができるようになりました。

そのような両者の状況を見ていたイエス様はどう思ったのでしょうか。その答
えは明白です。飼い主のいない羊のような有様を深くあわれまれました。弟子
たちに「休みなさい」と言ったのも同じ深いあわれみから出た言葉だったので
しょう。「聖書と典礼」の5頁の下に羊についての説明があります。「羊は弱い
動物なので、飼い主がいないと野の獣の餌食にされてしまう」と書いてありま
すが、同時に羊という動物は牛と同じくらいの知能をもち、アレルヤ章で歌っ
たように耳も非常によく、目の視野も 270~320° という、ほとんど自分の後ろ
を振り返らずとも見える動物だそうです。また、群れを作りたがる性質を持ち、

群れから引き離されると強いストレスを受け、先導者（リーダーや飼い主）に従う傾向がとても強い動物でもあるそうなので、イエス様が見た群衆は、その先導者を見いだせず、身体的にも肉体的にも弱ってしまっている人々の姿だったのでしょう。ご自分の似姿として造った人間がこんなにも弱り果ててしまっている世に、父である神はご自分の子であるイエス・キリストを同じ人間の姿で派遣し、その先導者として世に与えてくださいました。そのイエス・キリストは第2朗読でパウロが言うように、「わたしたちの平和です」。神から離れてしまった人間を、もう一度神に立ち返らせ、十字架によって今生きているわたしたちをも含むすべての人間の罪を背負ってくださいました。すべては、「神はわたしたちの救い」ということを実現し、二つのものをもう一度一つにするためでした。

この偉大で大きな恵みに感謝と信頼を置いて、この感謝の祭儀を続けてまいりましょう。また、多くの子どもたちが今週から夏休みに入ることと思います。子どもたちが夏休み中に神様の愛をたくさん感じ、その愛を他の人々とも分かち合うことができるように共に祈ってまいりましょう。